

戦争と人間

——映画文学人生論

原作：五味川純平 (1960-82) 「三一書房」
監督：山本薩夫(1970-73) 参考：『ノモンハン』1975
出演：伍代由介 滝沢修 脚本：山田信夫
伍代由紀子 浅丘ルリ子 撮影：姫田真佐久
伍代俊介 北大路欣也 音楽：佐藤勝
伍代順子 吉永小百合 伍代喬介 芦田伸介

生きて虜囚の辱を受けず

映画『戦争と人間』三部作の上演時間は九時間二十三分。原作の読了所要時間は約六十時間。映画も小説もこれだけ長いと楽ではない。

それでもガマンしてつきあったのは、満州事変前夜から終戦に至るまでの昭和前期（昭和二十年まで）の歴史をふりかえり、新興財閥伍代一族の人々の運命に重ね合わせながら、私自身も登場人物の一人として考えたからだ。私はなぜこの世に生まれてきたのか？ 何のために？

私は戸籍の上では、昭和十四年三月、満州国哈爾濱市（ハルピン）で出生となっている。二か月後の五月には満州とモンゴルとの国境のノモンハンでソ連と日本との戦争が勃発した。いわゆるノモンハン事件だが、日本軍の死者・行方不明が八千人以上という数字から判断すると単なる国境紛争事件ではない。戦争——しかも負け戦だ。

ところが、国民は昭和二十年八月の無条件降伏による終戦までノモンハンが負け戦だということを知らされなかった。太平洋戦争がポロポロの負け戦で終わってからやっとノモンハンも負けていたことがあきらかになった。

今でも国民のほとんどはノモンハンの負け戦を知らない。私も最近まで知らなかった。歴史には興味があつたが、昭和前期の歴史だけはあまりにも重苦しく、暗すぎるので、敬遠していた。しかし、それではいけない。そもそも歴史とは敗北か



戦争と人間

映画文学人生論

ら教訓を学ぶものではないか。

『戦争と人間』の作者五味川純平によれば、日本軍はノモンハンの敗戦から何も学ばなかった。ノモンハンの作戦をたてた参謀が太平洋戦争ではガダルカナルで同じ負け方を繰り返した。

昭和十六年一月には、当時の東條英機陸軍大臣が『戦陣訓』を示達した。「生きて虜囚の辱（はずかしめ）を受けず」などの軍人としてとるべき行動規範である。

昭和二十年八月の無条件降伏で、日本人は虜囚の辱を受けた。東京裁判で東條英機など七人のA級戦犯が死刑の判決を受け、約千人のBC級戦犯も死刑に処せられたが、ノモンハンとガダルカナルの作戦参謀は生き延び、国会議員に選ばれた。前線の指揮官は責任をとって自決したが、作戦参謀は責任をとらなかつたという。

『戦争と人間』の歴史から学ぶ初歩的な教訓のその一は、「敵を知り、己をれば百戦危うからず」という孫子の兵法。負け戦の原因は要するに敵の戦力を過小評価し、己の力を過大評価したことだ。征韓論で朝鮮人をあなどり、日清戦争で中国人をあなどり、日露戦争でロシア人をあなどつた結果が無条件降伏の憂き目である。

黒船来航の米英両国はあなどつてはいなかつたが、尊皇攘夷、鬼畜米英の叫び声が空しい。

夏草や兵どもがノモンハン